

史跡賀茂御祖神社境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂御祖神社境内

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、整備事業にともなう史跡賀茂御祖神社境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

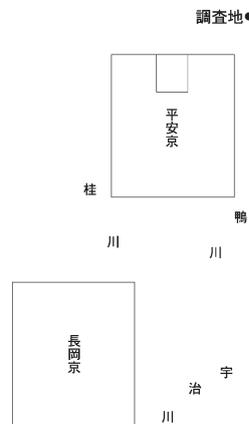
平成 20 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 史跡賀茂御祖神社境内 |
| 2 調査所在地 | 京都市左京区下鴨泉川町地内 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 賀茂御祖神社 代表役員 新木直人 |
| 4 調査期間 | 2008年2月7日～2008年3月26日 |
| 5 調査面積 | 100 m ² |
| 6 調査担当者 | 平尾政幸 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「相国寺」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 遺物の種類別に通し番号を付した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 平尾政幸 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	2
(1) 層序	2
(2) 遺構	5
3. 遺 物	7
4. ま と め	10

図 版 目 次

図版1	遺跡	1 全景（表土および旧トレンチ排土後 北東から）
		2 全景（北東から）
図版2	遺跡	1 南調査区全景（北から）
		2 西調査区全景（東から）
		3 北調査区全景（南から）
		4 東調査区全景（西から）
図版3	遺跡	1 東調査区島東端部（西から）
		2 北調査区島北端部（北から）
		3 西調査区西部および西拡張区（東から）
図版4	遺物	土器類
図版5	遺物	土器類
図版6	遺物	軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査前全景（東から）	2

図3	調査風景（地形測量）	2
図4	船島周辺の地形と調査区平面図（1：200）	3
図5-1	調査区土層図（1：100）	4
図5-2	調査区土層図層名	5
図6	SE01 実測図（1：50）	6
図7	古墳時代土器実測図（1：4）	7
図8	平安時代土器実測図（1：4）	7
図9	軒瓦拓影・実測図（1：4）	9

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	8

史跡賀茂御祖神社境内

1. 調査経過

この調査は境内整備事業に伴う第6次調査である。^註調査地は賀茂御祖神社本殿南東部に位置する舩島とその周辺である。当地では平成3年度に京都府および京都市文化財保護課の指導により発掘調査が実施されており、この調査により舩島の周囲を流れていた旧流路や集石遺構が検出され、また土器類も多く出土している。

今回の調査では島本来の形状とその変遷を確認するとともに出土遺物と層位・遺構との関連の確認・記録を目的とした。

まず舩島とその周辺の現状を地形測量した後、舩島本来の形状を確認するために幅2mの調査区を東西・南北方向、十字形に設定した。このうち東および南の調査区は前回調査区との位置関係を明らかにするためほぼ重複する位置に配置した。

南および東調査区で平成3年度のトレンチを検出した。この箇所については確認のためほぼ前

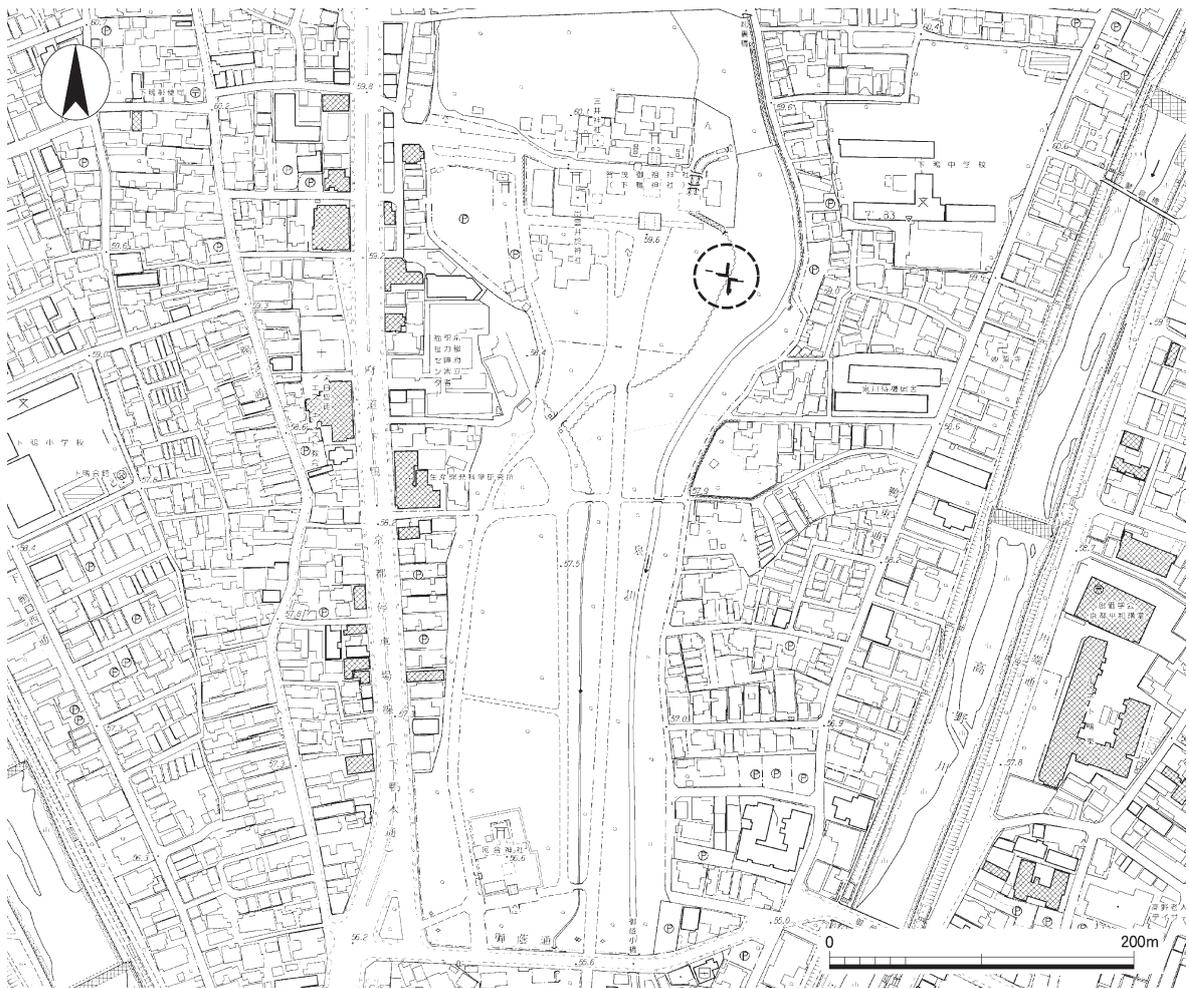


図1 調査位置図 (1 : 5,000)



図2 調査前全景（東から）



図3 調査風景（地形測量）

回のトレンチの形状に沿って掘り下げ、土層断面を記録するにとどめた。ただ、南区の南方で石組み井戸 SE01 を検出したため、この部分について一部拡張し、井戸の調査を行った。また、東区では検出した地山面を東方に追求したところ、平安時代とその下層に古墳時代の遺物を少量含む流路跡 SD02 を検出し、一時期の島の東端が確認できた。

北および西調査区では、表土と江戸時代後期の遺物を含む土層を除去した時点で平安時代の土器類を多く含む砂泥層や砂層を検出した。この上面で遺構検出を試みたが、顕著な遺構は認められなかった。この面以下はできる限り島の形状を損なわないように配慮し、調査区の壁に沿って土層堆積状況の確認のため約 0.7 m の幅で掘り下げを行い、土層の堆積状況を観察した。

その結果、平安時代の土師器皿などを多量に含む砂層および砂礫層を確認した。また、その下層に古墳時代の流路跡 SD03・SD04・SD05 を検出し、東調査区のものとはほぼ対応する時期の島北端および西端を検出した。さらに、この流路の西限を確認するため西調査区と小川を隔てた西側に拡張区を設定した結果、これらの流路は現在の島西側を流れる小川付近以西には広がっておらず、安定した基盤層が存在することが判明した。

2. 遺 構

(1) 層序

船島は現状では南北約 25 m、東西 18 m の涙滴形の平面形を呈し、島中央の南寄りに位置する頂部の標高は 60.1 m である。周囲を流れる小川の平均的な水面高は 58.4 m 前後で、島頂部との高低差は約 1.6 m である。一方、検出した古墳時代の流路の検出位置からみてその時期の島の形状は現在のものよりかなり小さく想定できる。現在の船島の形状はこの初期の島を核として、平安時代後期に盛土された整地層、上流からの流れによって運ばれ主として島北部に堆積した砂礫層、さらに近世以降の整地層によって形成されている。平安時代後期の整地層は島中央からやや南および西部寄りにかけて分布しており、小片になった多量の土師器や瓦片を含んでいる。島北側の緩斜面に堆積した砂礫層中には完形の土師器皿が多く含まれていた。近世以降の整地層は中

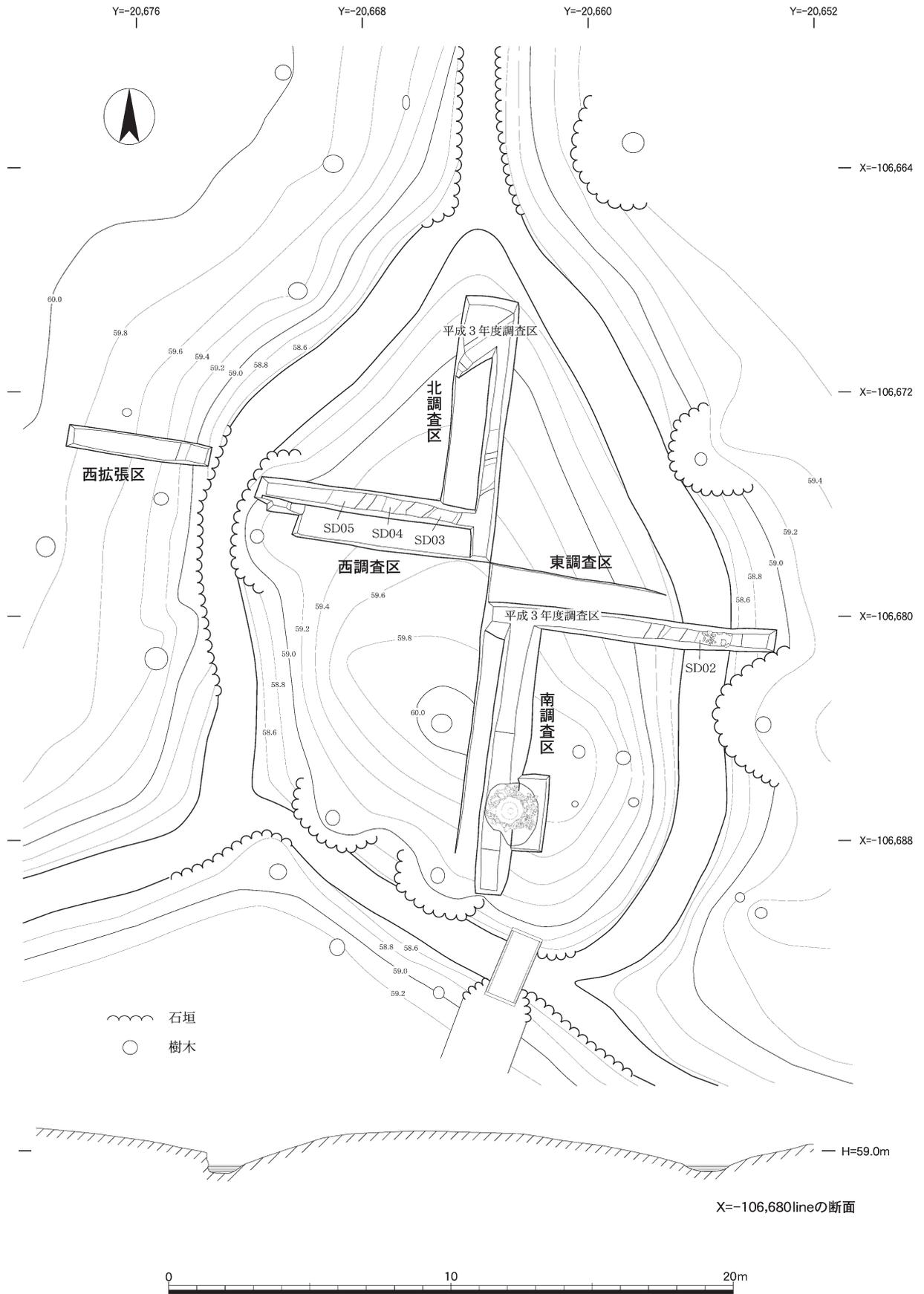


図4 船島周辺の地形と調査区平面図 (1 : 200)

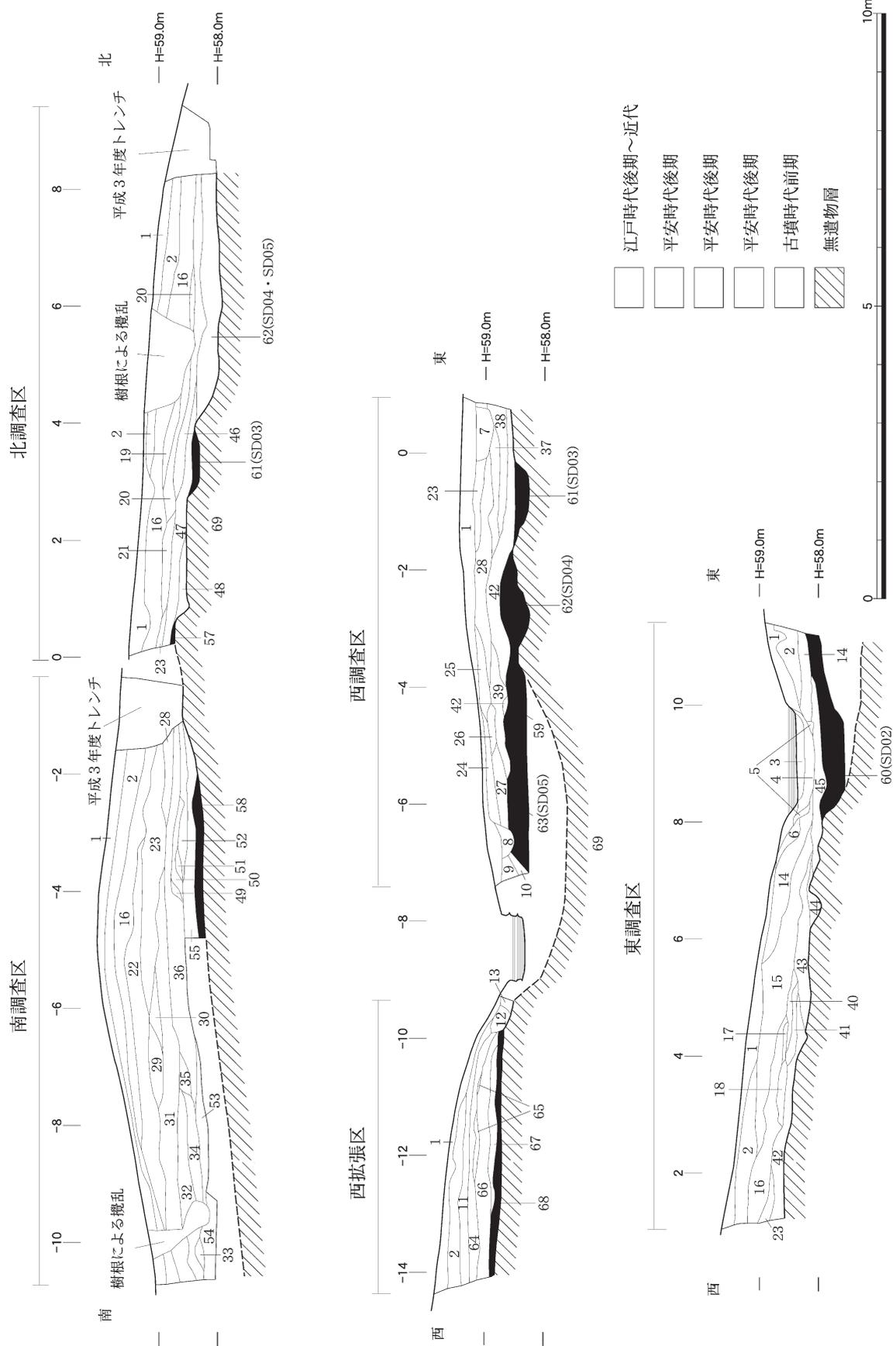


図5-1 調査区土層図(1:100)

1	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	36	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
2	10YR3/3 暗褐色砂泥	37	2.5Y4/2 暗黄灰色泥砂 小礫混
3	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (たたき)	38	2.5Y5/2 暗黄灰色泥砂
4	2.5Y4/1 黄灰色ベントナイト混和層	39	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 小礫混
5	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭片混	40	2.5Y5/3 黄褐色微砂
6	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	41	2.5Y5/2 暗灰黄色微砂
7	暗灰黄色砂泥	42	2.5Y5/2 暗黄灰色粗砂
8	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 礫混	43	10YR3/3 暗褐色粗砂
9	2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂	44	5Y3/2 オリーブ黒色細砂 シルト混
10	2.5Y4/2 暗灰黄色砂	45	10YR3/4 暗褐色粗砂
11	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥	46	5Y4/2 灰オリーブ微砂
12	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 礫混	47	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 礫混
13	2.5Y3/2 黒褐色砂泥	48	5Y4/2 灰オリーブ砂泥
14	2.5Y3/2 黒褐色砂泥	49	5Y6/1 灰色泥砂 土師器多量に含む
15	2.5Y4/4 オリーブ褐色微砂 小礫混	50	2.5Y6/2 黄灰色泥砂
16	2.5Y5/3 黄褐色微砂	51	2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫
17	2.5Y4/2 暗灰黄色細砂	52	5Y4/1 灰色砂泥 土師器片混
18	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥	53	2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
19	2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂	54	2.5Y5/1 黄灰色泥砂 礫混
20	2.5Y4/2 暗灰黄色微砂	55	5Y4/1 灰色泥砂 礫混
21	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂	56	5Y4/1 灰色砂礫
22	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥	57	2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
23	2.5Y3/2 黒褐色砂泥 土師器片混	58	2.5Y5/1 黄灰色粗砂
24	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥	59	5Y4/1 灰色微砂
25	5Y5/2 灰オリーブ色砂泥	60	10YR3/3 暗褐色砂礫
26	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	61	2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫
27	2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫	62	2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫
28	2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥	63	2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫
29	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥	64	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
30	10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥	65	2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
31	2.5Y5/1 黄灰色砂泥 土師器片混	66	2.5Y5/1 黄灰色砂泥 強く締まる
32	10YR3/2 黒褐色砂泥	67	2.5Y4/1 黄灰色砂泥 強く締まる
33	2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂	68	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 強く締まる
34	2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂	69	2.5Y5/1 黄灰色砂泥 礫混
35	2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥		

図 5- 2 調査区土層図層名

央やや南寄り付近が最も厚く、周辺部に向かって薄くなるが、島のほぼ全域を覆っている。

(2) 遺構

流路 SD02 東区、島東部で検出した古墳時代の流路。流れの方向は北東から南西で最も深い部分は幅約 2.5 m だが、この部分に堆積していたものと同質の暗褐色砂礫層が調査区外に延びており、正確な幅は不明である。最上部には平安時代後期の土器を含む砂層が堆積していた。

流路 SD03 北および西区で検出した北東から南西の流路。幅は 1.0 m、深さ 0.25 m 前後で、堆積土は暗黄灰色砂礫。古墳時代前期の土器が出土している。

流路 SD04 北および西区、SD03 の西側に検出した北東から南西方向の流路。幅は 1.5 m、深さ 0.3 m 前後で、堆積土は SD03 と同様の暗黄灰色砂礫。古墳時代前期の土器の小片が出土している。

流路 SD05 西区、SD04 のさらに西側に検出した北東から南西方向の流路。北区では SD04 堆積層との差は不明瞭で分離できなかった。幅・深さともに不明だが、西拡張区では検出していないので最大でも 5.0 m 以内には納まる。堆積土は暗黄灰色砂礫で古墳時代前期の土器の小片が少量出土している。

平安時代の整地層 古墳時代の小規模な島を核としてその上部に盛土されている。盛土の厚さ

は現状の島中央やや南寄りで約 1.0 m と最も厚く、周縁に向かって薄くなっている。整地土は一樣ではなく多くの層から構成されている。しかし、出土した土器類はすべて平安時代後期に属し時期幅がほとんどなく、長期にわたって整地が繰り返された様子はいかたがえなない。

平安時代の流路 主に島北部から東部にかけて流路堆積と思われる汚れのない砂礫層が厚く分布していた。砂礫層の一部は前述の整地層を覆っていることから平安時代後期の整地後に堆積したことがわかる。分布状況から北西の上流方向から水流によって運ばれた砂礫層が島裾部に順次堆積していったものと考えられ、その結果、島の北側および東側には緩やかな斜面が形成されている。この砂礫層の範囲は調査区内では確認できなかったため、流路の規模は不明である。細砂層や礫層が交互に重層しており、流れの状態が一定していなかった状況を示している。砂礫層中

に含まれていた土器類の特徴から、これらの砂礫層は平安時代後期の比較的短期間に堆積したことが確認できた。

井戸 SE01 南区、島南部で検出した円形石組み井戸。掘形は径約 1.8 m の円形で南側の一部が崩れている。深さは検出面から約 1.7 m。石組み内径は約 1.0 m で、石組みは 9 ～ 10 段、高さ 1.4 m が残存していた。構造はやや特異で、石組み最下段に大型の石材が使用されているのは石組み井戸の通例であるが、基底部から 0.7 m 付近の一段分にも同様の大型の石材が使用されており、それから上部の内径が上方に向かい狭まる。井戸内の堆積土はこの 0.7 m 付近の大型の石材下端あたりを境に様相が異なり、下部には比較的堅く締まった暗灰色の砂泥層が堆積していたのに対して、それより上部には

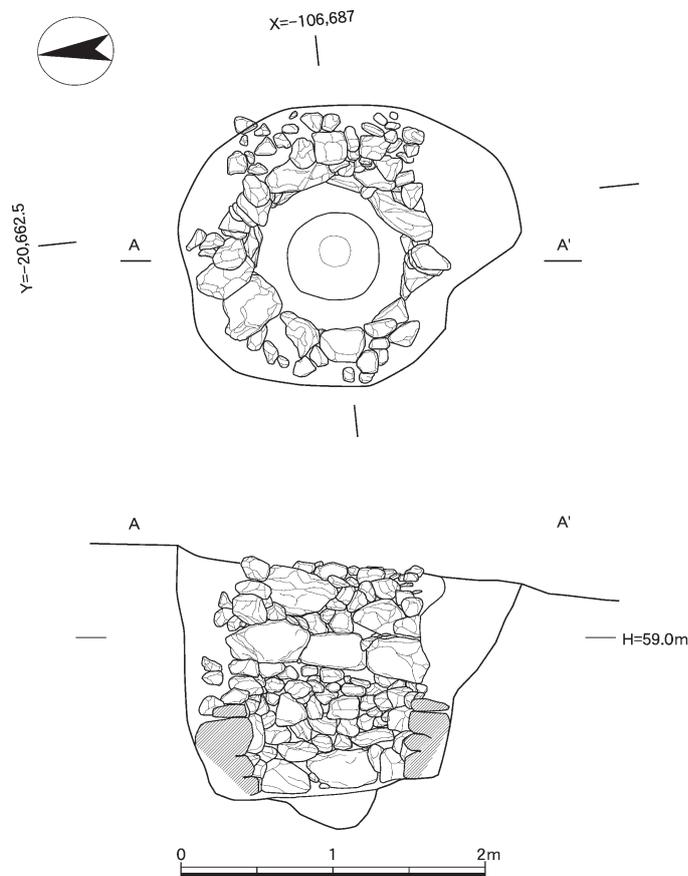


図6 SE01 実測図 (1 : 50)

表1 遺構概要表

時代	遺構
古墳時代	流路 (SD02・SD03・SD04・SD05)
平安時代後期	流路、整地層
江戸時代後期	石組み井戸 (SE01)

径 20 cm 前後の礫や暗褐色の締まりのない土層がみられた。出土遺物は下層では江戸時代後期の染付磁器（図版 5 - 36・37）や土師器の小片（図版 5 - 38）が出土したが、上層ではガラス瓶や鉄線など近代のものと思われる遺物がある。このような状況は、江戸時代後期に構築された井戸が半ば埋没した時点で井戸内を掘り返さずにその上部に石組みを積み足した可能性を示している。とすれば、この井戸が取水を目的とした井戸本来の機能とは異なる意味を持っていたことが推測できる。

3. 遺物

出土遺物は主に土器類で、そのほか少量の瓦類がある。

古墳時代の土器（図 7、図版 4）古墳時代の土器類は西区の流路 SD03・SD04 やその上部を覆う砂礫層（層 56）から出土した。すべて古墳時代前期に属するものである。1 は甕の上半部で口縁端部を欠失するが、外面ハケメ調整、頸部に横方向の櫛描直線文とその下方に斜方向に刻目文を施す。内面は横方向のヘラケズリ。胎土は砂粒を含む。2 は甕口縁部の小片である。器表面はナデ調整。3 は甕底部で外面タタキ調整、内面は縦方向のケズリ。胎土に砂粒を多く含む。4 は有孔鉢の底部。底部中央に焼成後に穿孔されている。外面は板ナデ調整、内面は不明である。胎土に砂粒を含む。5 も有孔鉢の底部であ

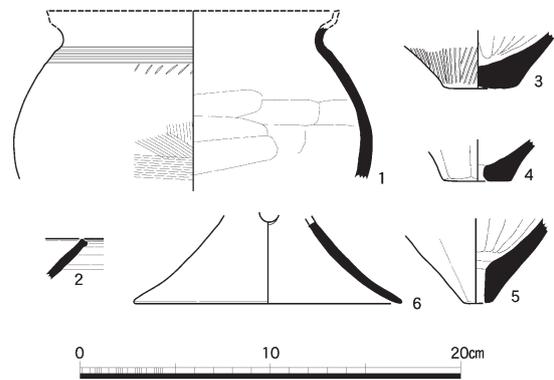


図 7 古墳時代土器実測図（1：4）

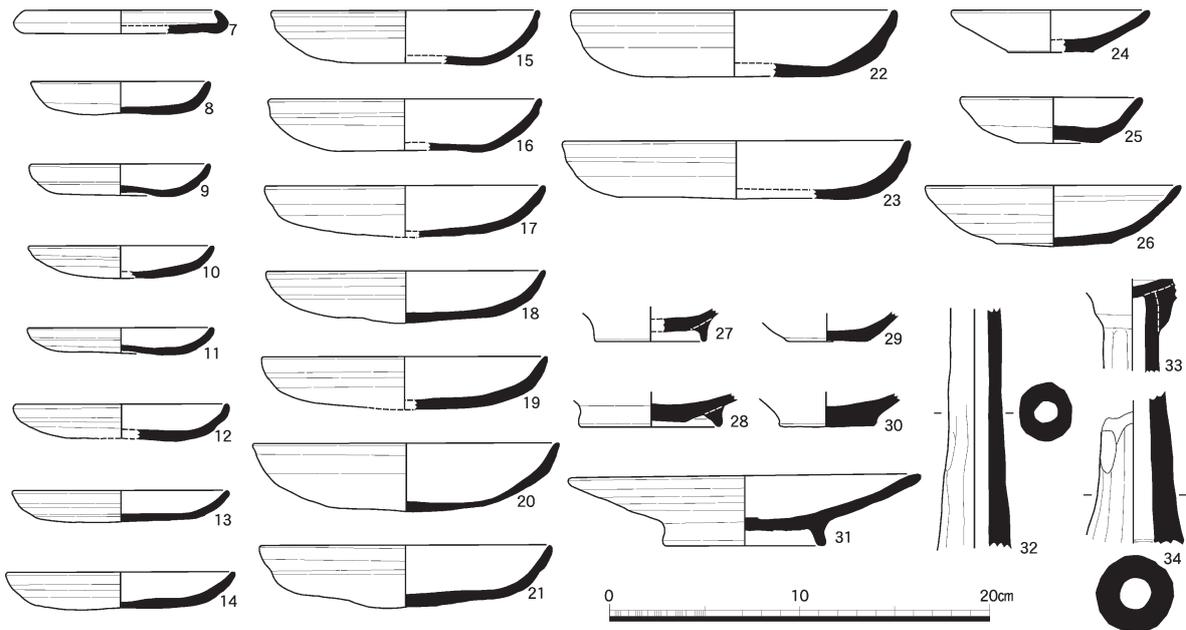


図 8 平安時代土器実測図（1：4）

るが、穿孔は焼成前である。外面は丁寧な板ナデ調整、内面は縦方向のケズリで、孔の周囲を横方向にヘラケズリしている。6は高杯裾部。外下方に大きく開き、上端部に透かしが1箇所確認できる。表面が磨滅し、調整は不明だが、胎土は精良である。

平安時代の土器（図8、図版4・5）土師器・白色土器があるほか近世の土層から白磁・瓦器が1片ずつ出土している。出土土器類の総破片数6,154片のうち97.7%を土師器が占め、白色土器は2.3%である。

ここでは平安時代後期の整地層およびその上部に堆積した砂礫層から出土した土器類について記述する。土師器には皿Ac（7）・皿N（8～23）がある。皿Nには口径9.6cm前後（8～11）・11.6cm前後（12～14）・14.5cm前後（15～19・21）の3群とそれより大型のもの（20・22・23）が少量ある。これらの皿Nには技法や形態の特徴が平安京で出土する皿Nと同様のものの（12・14～16など）ほか京内ではあまり見かけない特徴を持つもの（8・9・19～23など）も多い。このように京内にほとんど供給されていない土師器が相当量出土している点は注目される。白色土器には皿（24～26・29・30・35）・台付き皿（27・28・31）・高杯（32～34）がある。皿はすべてロクロ整形で底部外面に糸切り痕を残す。台付き皿も同様に糸切り痕を残し、その外側に高台を貼り付ける。高杯は芯を用いた棒状の軸部を面取りし、杯部との接合部に段を持つ。土器類の出土地点と層位は、15が東区層41、12が東区層43、31が東区層45、9・17・18が北区層16、7・8・11・14・20・22・25・26が北区層20、13・30・34が北区層21、10・16・19・21・23・27～29・33が北区層46、24・32が西区層42である。

瓦類（図9、図版6）瓦類には軒瓦を含む平安時代後期の瓦と江戸時代の丸瓦片がある。ここでは平安時代の軒瓦について記述する。

瓦1 蓮華文軒丸瓦 複弁6葉で中房はわずかに盛り上がる。蓮子は不明。軟質で砂粒を含む。東区旧調査区埋土出土。

瓦2 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで頭部は接しない。珠文は大きく密に配する。瓦当側縁および裏面をナデ調整する。北区層16出土。

瓦3 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで珠文はない。周縁はやや幅広。胎土に砂粒を含み硬質である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器	1箱	土師器6点	1箱	0箱
平安時代後期	土師器、白色土器、瓦	7箱	土師器17点、白色土器12点、軒丸瓦7点、軒平瓦10点	5箱	0箱
江戸時代後期	土師器、染付磁器、瓦	2箱	土師器1点、染付2点	2箱	0箱
合計		10箱	55点（2箱）	8箱	0箱

西拡張区層 64 出土。

瓦 4 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで珠文はない。周縁は狭い。胎土に砂粒を含み軟質である。南区層 36 出土。

瓦 5 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで珠文はない。側縁および裏面はナデ調整。胎土に砂粒を含みやや軟質である。北区層 16 出土。

瓦 6 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで細い。珠文はやや粗く配する。軟質である。西区層 28 出土。

瓦 7 巴文軒丸瓦 巴は左巻きで外区に珠文を配する。胎土に砂粒を含み軟質である。北区層 20 出土。

瓦 8 唐草文軒平瓦 上下に分けた内区上段に唐草、下段に珠文を配する。顎は無く、凸面に縄目タタキ痕を残す。胎土は砂粒を含みやや軟質。讃岐産か。北区層 20 出土。

瓦 9 唐草文軒平瓦 瓦当は半折り曲げ。唐草は主文枝葉ともに強く巻く。胎土は細粒でやや

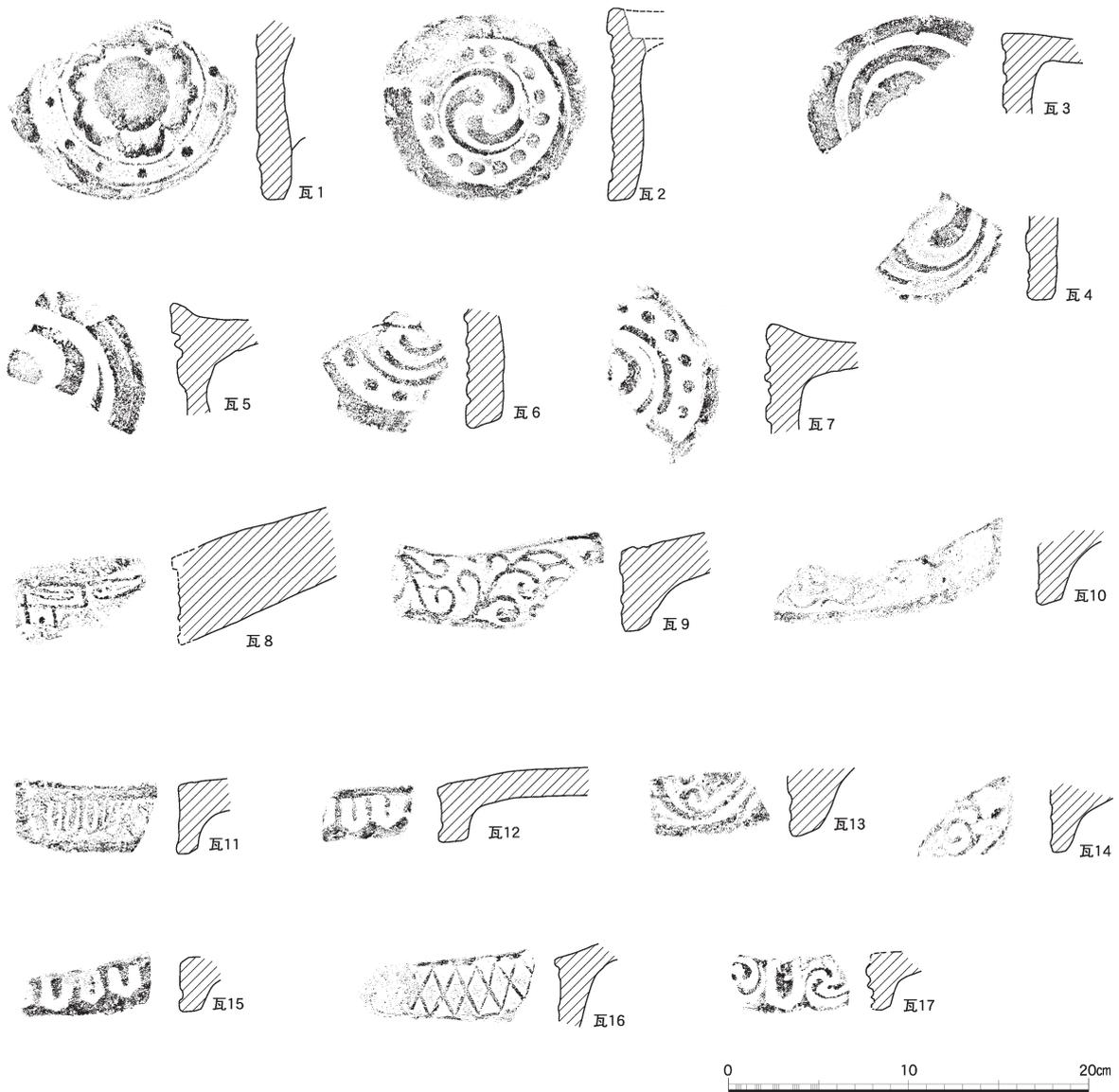


図9 軒瓦拓影・実測図

軟質。栗栖野瓦窯の製品。東区層 43 出土。

瓦 10 唐草文軒平瓦 著しく磨滅しており文様は判然としないが唐草は強く巻き込む。砂粒を多く含み軟質である。北区層 20 出土。

瓦 11 剣頭文軒平瓦 剣頭文は蓮弁状で、単位は幅が狭く密に接している。軟質で表面が磨滅している。西拡張区層 66 出土。

瓦 12 剣頭文軒平瓦 瓦当は半折り曲げ。右端の剣頭文は幅広である。胎土は砂粒をわずかに含み軟質である。北区層 20 出土。

瓦 13 唐草文軒平瓦 顎部のみ残存。唐草の巻きは強い。小野瓦窯に類似する例があるが、小片のため同範かは不明である。軟質で磨滅している。西拡張区層 67 出土。

瓦 14 唐草文軒平瓦 瓦 9 と同系の文様と思われるが小片のため不明である。胎土は細粒でやや軟質。北区旧調査区埋土出土。

瓦 15 剣頭文軒平瓦 瓦当は半折り曲げで幅が狭い。剣頭文の大きさが不揃いである。胎土は砂粒を含みやや軟質である。西区層 23 出土。

瓦 16 斜格子文軒平瓦 斜格子文は細く均一に配されている。胎土は細粒で軟質である。北区層 16 出土。

瓦 17 剣巴文軒平瓦 瓦当は半折り曲げ。剣頭文とその両側に左巻きの巴文が配されている。瓦当の中心付近と思われるが小片のため詳細は不明である。西拡張区層 66 出土。

4. まとめ

史跡賀茂御祖神社境内では平成 2 年度以降 9 次にわたる発掘調査が実施されているが、今回調査を行った船島とその周辺も平成 3 年度に京都府および京都市文化財保護課の指導により発掘調査が実施されている。今回の調査では島の東西で古墳時代の流路を検出したが、これらの流路は泉川の旧流路と思われ、現在島の西部を流れる小川付近を西限とする範囲を時期とともに位置を変えながら南西方向に流れていた状況を示している。

平安時代の流路の砂礫層や整地層の状況から、船島は 12 世紀代に泉川旧流路内の中州状の地形を核として整地が行われ、ほぼ現在のものに近い形状となったことが確認できた。

平安時代後期の土器類は整地層や流路の砂礫層から多量に出土したが、特に島北部では完形やそれに近いものが多く出土し、大半が 12 世紀代に属するものである。他の地点を含め出土土器類中に煮炊具や貯蔵具が全く含まれないことや白色土器が一定量出土している点からみて、これらは島上で行われた何らかの祭祀行為に供された器物である可能性が高い。

島南部で検出した江戸時代後期の石組み井戸 SE01 は当神社が所蔵する『烏邑縣纂書』舟ヶ嶋の項に「棧門ノ外 御手洗川ノ際ナリ 旱魃ノ時土民此井ヲ搦テ雨ヲ祈る也」と記載のある井戸と考えられ、この場所で雨乞いの祭祀が行われていたことが明らかになった。

註

既往の調査については、以下の報告がある。

- 1) (財) 糺の森顕彰会「奈良の小川・瀬見の小川発掘調査の報告会」『会報』第 14 号 1990 年
- 2) 宗教法人賀茂御祖神社『史跡賀茂御祖神社境内（糺の森）発掘調査報告』1992 年
- 3) (財) 糺の森顕彰会「奈良の小川・瀬見の小川発掘調査の報告会 第 2 報」『会報』第 16 号 1992 年
- 4) 津々池惣一・櫻井みどり『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 5) 櫻井みどり『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-12 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- 6) 近藤奈央『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-15 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 2006 年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもみおやじんじゃけいだい							
書名	史跡賀茂御祖神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-19							
編著者名	平尾政幸							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもみおや 史跡賀茂御祖 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしさきょうく 京都市左京区 しもがもいずみかわちょう 下鴨泉川町 ちない 地内	26100	A309	35度 02分 17秒	135度 46分 25秒	2008年2月 7日～2008 年3月26日	100m ²	整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡賀茂御祖 神社境内	史跡	古墳時代	流路	土師器				
		平安時代後期	流路、整地層	土師器、白色土器、瓦				
		江戸時代後期	石組み井戸	土師器、染付磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-19
史跡賀茂御祖神社境内

発行日 2008年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961